

追 悼



故 園田孝夫 先生 略歴

(昭和6年7月29日—平成22年4月29日没)

<学歴・職歴>

昭和31年3月 大阪大学医学部卒業
昭和31年4月 医師実地習練(大阪大学医学部附属病院)開始
昭和32年4月 大阪大学大学院医学研究科入学
昭和36年3月 同上修了
医学博士の学位授与(大阪大学)(第187号)
昭和36年4月 大阪大学医学部助手
昭和37年7月 大阪大学医学部講師
昭和38年4月 ハーバード大学医学部外科, マサチューセッツ総合病院内分泌外科に留学
昭和40年2月 大阪大学医学部助教授
昭和43年7月 大阪大学医学部教授
昭和63年10月 大阪大学医学部附属病院院長(併任)
平成2年7月 大阪大学医学部附属バイオメディカル教育研究センターに配置換
平成3年9月 大阪府立病院長
平成11年12月 大阪府立病院名誉院長
平成12年1月 宝塚造形芸術大学教授(特任)

<委嘱>

厚生省医師試験委員
厚生省医療関係者審議会専門委員
厚生省公衆衛生審議会専門委員
文部省学術審議会専門委員
大阪府特定疾患調査研究会腎・尿路難病研究会会長
大阪府衛生対策審議会臨時委員
大阪府衛生対策審議会専門委員
大阪府災害拠点病院等連絡協議会会長

<主な役職>

昭和46年4月～平成3年5月 日本泌尿器科学会理事
昭和63年5月～平成1年4月 日本泌尿器科学会会長
昭和50年10月～ 日本移植学会理事
昭和54年9月～昭和55年9月 日本移植学会会長
昭和58年9月～ 日本移植学会常務理事
昭和53年4月～昭和54年4月 日本腎臓学会西部部会会長
昭和58年10月～昭和5年12月 日本腎臓学会理事
昭和63年4月～平成6年3月 日本内分泌外科学会理事
平成4年4月～平成5年4月 日本内分泌外科学会会長
昭和55年6月～平成10年2月 (財)大阪腎臓バンク理事長
平成9年1月～平成11年1月 全国腎臓バンク連絡協議会会長
平成7年4月～ (社)日本臓器移植ネットワーク理事
平成14年9月～平成16年3月 京阪さい帯血バンク理事長
平成15年5月～平成21年5月 (財)日本腎臓財団理事

<受賞歴>

昭和37年4月 坂口賞(日本泌尿器科学会)
昭和57年10月 腎研究会学術賞((財)腎研究会)
平成4年4月 鈴木金治記念医学研究奨励賞((財)鈴木泌尿器医学振興財団)
平成7年10月 腎研究会賞((財)腎研究会)
平成9年8月 功労賞(大阪泌尿器科臨床医会)
平成11年4月 紫綬褒章(内閣総理大臣)
平成15年4月 日本泌尿器医学功労賞(鈴木記念泌尿器医学賞基金)
平成18年4月 瑞宝中綬章(内閣総理大臣)

園田孝夫先生を偲んで

名古屋市立大学大学院医学研究科腎・泌尿器科

郡 健二郎

恩師、日本腎臓学会名誉会員、大阪大学名誉教授 園田孝夫先生は平成 22 年 4 月 29 日にご逝去されました。先生が心筋梗塞による心臓破裂により急逝された、との訃報に接したのは日本泌尿器科学会総会の期間中で、会場内は騒然となり深い悲しみに包まれました。享年 78 歳でした。

弟子の一人として身に余る光栄と感じつつ追悼文を捧げていますが、ユーモア好きの園田先生のことですから、「何を書いているのや。俺はここにおるで。」と今にも声をかけていただけそうになり、ご壮健であられた先生の急逝をいまだに信じるできません。

園田先生は、昭和 6 年 7 月 29 日大阪府で生誕され、昭和 31 年大阪大学医学部をご卒業後、同附属病院における医師実地習練の後、泌尿器科学教室に入局されました。その前年には、東京大学、新潟大学を経て赴任された楠隆光先生が、それまでの皮膚泌尿器科学を脱皮させた、外科領域の一分野とした新しい泌尿器科学を築かれようとしていました。楠先生の厳格な指導ぶりは多くの逸話で語り継がれていますが、園田先生は洗練されたスマートさゆえに、楠先生から厚い信頼を受けられたそうです。

そんな新風吹き込む教室で、園田先生は俊才としての叡智をいかんなく発揮され、昭和 36 年大学院修了後、助手、講師、助教授を経て、昭和 43 年 7 月に 36 歳の若さで教授に昇任されました。平成 2 年 7 月には、既存の組織だけでは医学は硬直するとの考えのもとに医学部附属バイオメディカル教育研究センターを新設され、自らが臓器制御部門臓器移植学研究部に移られました。今でこそ、どの大学でも組織を柔軟に改革しようとの動きは当然のようになっていますが、このセンター設立はその先駆けになったとも言えるものでした。この間、昭和 63 年 10 月から平成 2 年 10 月まで医学部附属病院長ならびに同大学評議員を併任されました。

大阪大学退官後は大阪府立病院(現大阪府立急性期・総合医療センター)の病院長に就任し、優れた判断力、実行力をもって同病院の近代化事業に多大なる貢献をされ、平成 11 年には同名誉院長の称号を付与されました。平成 12 年からは、宝塚造形芸術大学(現宝塚大学)教授(特任)に就任し、それまでとは一風異なる学生教育に楽しんであたっておられました。

先生が究められた領域と足跡は泌尿器科学の垣根を越えて拡がり、臓器移植学、腎臓病学、内分泌外科学、男性科学(アンドロロジー)の分野において多彩な研究を展開され、独創性に富んだ優れた業績を次々と残し、数多くの優秀な人材を輩出されました。

なかでも特筆すべき業績は、先生が昭和 38 年 4 月から翌年 12 月までのハーバード大学医学部外科、マサチューセッツ総合病院内分泌外科にご留学された経験をもとにした腎臓移植と副甲状腺外科です。

先生は、人工腎臓がわが国で普及する以前から、慢性腎不全に対する根治的治療法として同種腎移植の必要性に着目されていました。昭和 40 年以来、数多くの腎移植を手がけられ、初期には 30 日間にわたる移植腎生着例を、翌年には 1 年 7 カ月に及ぶ社会復帰例を経験し、以後の腎移植医療の定着に光明をもたらされました。なかでも、免疫抑制薬の副作用である多核白血球減少に伴う感染症が多いことから、急性拒絶反応に直接関与するリンパ球のみの除去手段として、胸管瘻造設術および胸管リンパ液透析法を世界

に先駆けて考案されました。さらに薬剤として副作用の強い免疫抑制薬の代わりに、わが国で発見された新しい抗生物質(ミゾリビン)に核酸代謝阻害効果があることに着目され、動物実験により移植腎生着延長効果を証明し、臨床応用に初めて成功されました。

先生は、血縁者間の生体腎移植のみならず献腎移植の重要性を早くから唱えられ、昭和 55 年に財団法人大阪腎臓バンクを設立し、長年理事長を歴任されたほか、日本移植学会などの要職に就かれ、腎移植の啓発と普及に指導的役割を果たされました。

園田先生のもう一つの偉業は、内分泌外科学の発展に寄与されたことです。泌尿器疾患のなかで最も多い尿路結石症の発生原因を究明するなかで、本症は代謝・内分泌異常症の一合併症であり、その背景には種々の疾患が潜在することを明らかにされました。特に原発性副甲状腺(上皮小体)機能亢進症に尿路結石の合併が散見されることに着目し、世界で初めて尿路結石患者から本疾患の発見に努め、その診断法の確立と外科的治療法を定着させられました。

また、先生は動物実験により、副甲状腺の超低温保存法を考案し、続発性副甲状腺機能亢進症に対する保存副甲状腺の自家移植に世界で初めて成功されました。先生の副甲状腺外科への思いは強く、後に、甲状腺外科医の藤本先生らとともに日本内分泌外科学会を創設されました。

園田先生は学術面の功績だけでなく、文部科学省、厚生労働省、大阪府の審議会など数多くの委員を務められ、わが国における医学、医療行政にも大きく貢献されました。

これら一連の業績に対して、日本泌尿器科学会坂口賞、腎研究会学術賞、鈴木金治記念医学研究奨励賞、腎研究会賞、大阪泌尿器科臨床医学会功労賞、鈴木記念泌尿器医学賞基金日本泌尿器医学功労賞を受賞され、平成 11 年春には紫綬褒章を、平成 18 年春には瑞宝中綬章を受章されておられます。

先生は人間的にも魅力に溢れ、会話はウィットに富み、国家を語っても、女性や医療を論じても眼識は鋭く、楽しい会話は私たちを魅了し、いつも談論風発のなかにおられました。先生は多才な能力をお持ちで、幼少時からピアノ演奏と剣道をされ、私たちの教室が主催した学会の懇親会ではプロ奏者なみにピアノを弾いていただいたことがなつかしく思い出されます。

園田先生は、副甲状腺摘除術(ハイパラ)が大変お上手で、またお好きでした。「ハイパラがあつたら呼んでや。お金はこちらから出すからな。」と先生独特のエスプリのきいた言い回しで話され、何度となく助手を務めさせていただきました。先生の手術の手さばきはピアノ演奏のように流麗で、メイヨー 1 本で副甲状腺にまで到達される「匠の技」は、今でもしっかりと目に焼きついています。「インディアン頭の皮はぎと同じや」と言われながら、紙のように薄い筋肉を一層ずつ丁寧に剝離し、微出血すらさせない「匠の技」を、私が名古屋に赴任後は拝見する機会がなかったのは若い先生たちに申し訳なく、私自身ができる限り正しく伝えていきたいと思っています。

これからも高所からご指導賜りたいと思っていたときの急逝は無念であり、痛恨の極みであります。先生に育てられた私たち一同は、医学の発展のために精進してまいります。見守っていて下さい。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。安らかにお眠り下さい。